

勝沼と歩んだ4年間

岩田 美耶

山梨大学生命環境学部地域社会システム学科4年

1 はじめに

名古屋市出身の私は、「自然」といえば「公園」を連想する。けれども、それも今となつては昔の話である。勝沼を初めて訪れた時、視界いっぱいに広がる青々としたブドウ畑に感動した。これが今後4年間、足しげく通うことになる「勝沼」との出会いであった。

勝沼を訪れる前、私のブドウに対する認識は、「紫色のものはブドウ、その中でも大粒のものは巨峰、黄緑色のものはマスカット」であった。今振り返るとかなり恥ずかしい話である。このようなずさんな認識しかない当時の私にとって、勝沼は「見知らぬ土地」以外の何者でもなかった。

2 勝沼での4年間の取り組みについて

私は山梨大学と甲州市役所の共同研究として、勝沼における文化的景観に関する調査を4年間おこなってきた。1・2年目は主に価値調査をおこなった。ブドウが実る真夏の暑い中ひたすら傾斜地を登り下りし、地図にブドウ畑をプロットする作業をしたり、観光ブドウ園でヒアリングしたりした。慣れない土地の道を覚えることに必死だったのを今でも鮮明に覚えている。そんな中で、地域の方々が「暑いのに大変だね」、「お疲れ様」と声を掛けてくれたのが嬉しかった。

3年目からは文化的景観の普及啓発活動を主軸として、さまざまなプロジェクトに励んだ。勝沼に関する知識が全くなかった私が、プロジェクトの一環として子どもたちに「勝沼」を教えることになる。

地域における資源及び景観の独自性に対する関心・理解の向上を目的とし、勝沼地域の4小学校の3年生を対象に地域探検をおこなった。子どもたちにカメラを渡し、地域探検の途中で気になったものを自由に撮影してもらった。子どもたちは自然あふれる風景や人物の様子などをはじめ、ブドウ冷蔵庫などの今まで用途を知らなかったものや、保育園など個人的記憶に基づくものを撮影する傾向にあった。

地域探検によって、今までは「ただ見たことがある」という段階であった「日常生活にあるよくわからなかったもの」を、子どもたちが自分の言葉で説明できるきっかけとなり、地域への理解が深まったと考えられる。

子どもたちは「なんだろう」という疑問を持ちながら地域探検をしていた。ただ地域を歩くだけではわからないものがたくさんある。「なんだろう」の気持ちを抱きながら歩くことで、地域に対する「なるほど」が生まれる。地域探検は謎解きのようなものである。

しかし、大人になるにつれて「なんだろう」の気持ちは薄れる。それは、長年住んだ地域

であるが故に、地域を理解した「つもり」になっているからではないだろうか。そんな考えから、子どもから見た勝沼を大人と共有するために「企画展」を実施した。

企画展では、地域探検で子どもたちが撮影した写真をパネルにまとめ展示した。地域の資源などに関する子どもたちの学びを大人と共有する機会となった。この取り組みは、大人が地域を見つめ直すきっかけとなり、普段見慣れている地域の景色から資源の再確認や新発見、地域の独自性に対する理解の向上を可能にした。

4年目には絵本・紙芝居を作成した。小学校高学年を対象として、時代の流れが及ぼす勝沼の変化する部分と変わらない部分について考え、勝沼の歴史や文化についての学習を目的とした取り組みである。「馬頭観音」や「ブドウ冷蔵庫」といった、勝沼における資源や景観の今と昔を比較しながら物語が進んでいく。小学生でも理解しやすい、Q&A形式の絵本・紙芝居である。これにより、普段何気なく地域で見ているものの歴史的な意味・背景に対する理解が可能となり、地域の独自性の継承及び、勝沼に対するアイデンティティの向上が可能になる。

時間の都合で活用までは至らなかったが今後、学校や図書館などの教育現場で役立ててもらえたら幸いである。

3 卒業論文について

大学4年生で執筆した卒業論文では、小学校社会科の地域学習で用いられている山梨県中の社会科副読本における内容分析をおこなった。山梨県の市町村の中でも、甲州市は地域学習に力を入れていることが明らかとなったため、甲州市合併前の旧塩山市、旧大和村、旧勝沼町の副読本の内容においても分析をおこなった。

その結果、旧塩山市及び旧大和村は甲州市の副読本の内容と大差がないことがわかった。一方で旧勝沼町の副読本は、地域の基幹産業となっているブドウ栽培を軸として、地域の発展や暮らしの移り変わりに関する記載がなされていた。

やはり勝沼は特異な地域である。勝沼にとっての当たり前は、実は当たり前でないのだ。それ故に、勝沼の独自性を将来に受け継ぐことは大きな意味を成すと思う。

4 おわりに

今思えば、よそ者である私は子どもたちと同じだった。勝沼のことをよく知らないからこそ、「なんだろう」の気持ちを抱きながら地域を歩いていた。この気持ちと4年という時間は、私にたくさんの「なるほど」を与えてくれた。

文化的景観調査を経て、私が認識していた「紫のブドウ」は、デラウェア、甲州、ベリーA、藤みのりなどに変わった。シャインマスカットの皮は食べるようになった。ブドウ畑にぶら下がるピンク色の謎の液体を「ジベ」と呼ぶようになった。地域中に張り巡らされているただの水路は、扇状地におけるブドウ栽培において欠かせないものだを知った。「なんだろう」から始まる会話は、勝沼の方々が抱く地域への愛を教えてくれた。そして、「なんだ

ろう」が「なるほど」に変わる時、私にとって「見知らぬ土地」であった勝沼は、「第二の故郷」となった。

勝沼は四季そのものだ。春にはブドウの枝の選定がおこなわれ、ブドウ栽培の始まりを告げる。夏には緑が生い茂り、地域中にブドウの甘い匂いが漂う。秋には葉が色づき、10月第1土曜日には聖火が勝沼を巡る。こうしてブドウ栽培は終わりを迎えるのだ。そして冬には、「また来年」とでも言うかのように葉が落ち、次の春に向けてしばしの休息をとる。4度目の「また来年」はいつも以上に寂しく感じる。

4年間の文化的景観調査は有意義で貴重な経験であった。この調査による自らの成長をひしひしと感じる。そして何より、勝沼の方々と触れ合い、勝沼を知り、勝沼への愛を育んだ日々は私にとって一生の宝物である。

関わっていただいたすべての皆さまに、この場を借りて感謝申し上げたい。